

【目的】被服が人体を拘束する時に発生する被服圧は、被服素材の物性のみならず、被験者の体型、着付け、着慣れ、体位、呼吸運動などの多くの因子によって影響を受けると思われる。本研究では最も単純な和服である浴衣を用い、'和服圧'に影響を及ぼすヒトサイト因子の影響を明らかにする。また、浴衣着用時の官能評価も調査する。

【実験方法】被験者は20～30代の女子5名である。市販浴衣地を用い、被験者それぞれの寸法に合わせて浴衣を手縫いで作製した。通常用いているブラジャー・ショーツとすそよけを着用した被験者は、半幅帯と紐2本とを用いて自ら浴衣を着用(文庫結び)した。浴衣着用直後と一定負荷運動後の静立時、及び立礼・座礼や上肢上挙の運動時の圧を測定した。測定部位は、帯着用前のすそよけの紐(ほぼウエスト上に固定)、腰紐、胸紐の3面、帯着用後の帯の上下端とその中間、腰紐、胸紐の5面の計8水平面と前後正中線を含めた12垂線との交点96部位と殿部を含めた膝部より上方の左右の脚14部位、肩峰点から腋下付近の12部位の合計122部位である。

【結果・考察】浴衣着用直後の静立時における圧は、個人差が認められたが、後正中線上の測定部位を除く腹部にのみに発生(20mmHg以下)した。殿部より下方の脚と肩峰点から腋下にかけて圧は発生しなかった。運動負荷直後の静立時の圧は、くい込みの生じた帯の部位を除いて、着用直後の圧値より低くなった。これは運動のために、胸紐や腰紐がより周径の小さいウエスト位方向にずれてゆるんだためと思われる。座礼時に脚で発生する圧を調べたところ、左脚側面から得られた圧が右脚のそれに比べ、有意に高かった。しかし、衿あわせを逆にすると、右脚の圧が逆に左脚のそれより有意に高くなった。故に、脚で発生する和服圧の左右差は、身頃の重ね方に基因することがわかった。